

授業は生徒指導の弱点？チャンス？

2023・9・12 重枝 一郎

先日、1982年度本校卒の卒業生の方からお手紙をいただいた。それは、母校愛故に、本校の今を心配している内容でした。私は、「教師が育たない学校は、生徒も育たないので、しっかり先生方と学び合いながら、本校の過去をリスペクトし、未来に責任をもつ教育をしていきたい。今の生徒たちは様々な個々の目標をもって、積極的にチャレンジしています。その学校風土を今の先生たちが創り出しています」と返事を書いた。

《アクティブ・ラーニングの質を高めるために》

授業は生徒指導の弱点でもあり、また最大のチャンスでもある。教科指導から学級の荒れが始まり、逆に、教科指導を通して学級づくりが大きく前進する。一日の大半を占める授業において、ルールや人間関係をつくるのが最も効果的であり、学力向上だけでなく波及効果が得られる。そこで、いくつか授業の質を高めるためのポイントを示す。

(1) 「学習の勢い」は、維持ルールと向上ルールをコーチングで契約

「学習の勢い」は、「学習規律」と「教室環境を整える」ことが大切である。まず、「学習規律」についてだが、維持ルールの確立が必要である。維持ルールとは、集団でお互い気持ちよく生活するための必要なルール・マナーのことである。ただ、維持ルールの定着だけでだらだらと取り組むことは危険である。集団は必ず退行していく。そこで大切なのは、よりよい集団になるために工夫・改善していくことになる。この刺激がないと生徒は考えない集団になったり、一部の生徒が都合よく楽しむ集団になったりしていく。こうならないために、向上ルールを考えさせて実行させ、振り返らせ、また考えさせることが大切になる。その際、私は『「べき」のすり合わせ』というやり方で生徒たちと契約を結ぶ。「この教室で、みんなで学ぶ、学びあうためにはどうあるべきか？」という問いを、まず、個の考えをつくりそれを小集団でまとめ、全体で共有するコンセンサス実習である。教科の問題解決的な学習においても同じようなプロセスでやるので、筋の通った実践になる。大切なのはみんなで作った契約なので、違反したら私は、思い切り怒ることができ、そして遵守していたら思い切りほめ、一体感を高めていくことができるということ。このルール違反と遵守は、同等に2本のアンテナでしっかりキャッチしていくことが大切である。私たちや学級のリーダーは、往々にして違反だけに反応している場合がある。ルール遵守の姿をほめ、それが教室のリレーションづくりにつながることを理解させると、教室のルールが強化されていく。

前回の職員会で、女学院祭一般公開当日の生徒の動きが話題となった。こういうことも生徒個々で行動プランを考えさせるのが大切である。「女学院祭を楽しく過ごすためにはどうあるべきか？マインドと行動プランを考えよう」という問いである（校長研修だより29号「〇〇をよくする人」）。そこからの考えを踏まえて、対応策を考えさせると主体性の育成につながる。参画意識も高まるかもしれない。修学旅行の自主行動の伏線にもなるかもしれない。

次に、「教室環境」についてだが、またサッカーの指導でたとえ話をするが、例えば

でこぼこで石があるような狭いグラウンドでサッカーをがんばれという状況を体験させたり、考えさせたりする。この状況で意欲的に取り組むことはなかなかできない。ところが、広い芝のラインの入ったグラウンドに連れて行くと、がんばれと言わなくても勝手に意欲的に取り組む。だから野球部はグラウンド整備をするし、剣道部は道場をきれいにする。つまり、環境は大きく意欲と関連する。「教室環境」は学力向上につながると認識させることができる。また、教室を機能的にすることも、生徒に考えさせることが、やらされ感を与えないことにもなる。

(2) 「学習の雰囲気」は、振り返り活動の充実

毎時間の授業、学校行事等、振り返り活動はとても大切な生徒指導である。まずは、コミュニケーションは質より量ということでもいいと思う。例えば、授業の最後に振り返り活動を行ったとする。その際、「この解き方がわかるようになった」という意味面の振り返りを私たちは期待するが、「〇〇君に教えてもらってうれしかった」という感情面の振り返りも大事にしたい。継続していくと感情面しか言えなかった生徒が「〇〇君から教えてもらって、解き方の途中までわかった」といった意味面と感情面を統合した発言を聞くことができる。意味面だけを発言していた生徒も、友だちに教えていた立場だったとしても相手に対する感謝を言うようになる。このように、意味面と感情面を統合した表現が学校で行うコミュニケーションであり、そのことを全教育活動において指導していくことが重要である。すると生徒それぞれに小さな自信が生まれ「私たちはやれるかも」という感覚になり、それが身近なまわりの人からほめられたりすると「私たちにもやれる」という感覚になり、なんらかの結果が出て、このメンバーはすごいと言われたりすると「私たちはやれる」とチームとしての効力感が高まっていく。

(3) 授業デザインの工夫

- ① 「理解しよう」だけでなく、「説明しよう」といった発問
- ② ALで取り組むテーマに関する十分な予備知識
- ③ スタートからゴールまでの道筋を十分に示す
- ④ グループ学習をすればいいのではなく、生徒自身が「問い」をもつ

ALの実践は、今に始まったことではない。そして、総学、特活の優れた実践にヒントが隠されているので、教科をこえて学ぶことは教師の指導力を高めることにつながる。